

禪と共に歩んだ先人

山岡鉄舟 XXII

臨臨濟禪と接し、その精神性や美意識に感化される事により、自分自身を高め、偉大な功績を残した先人達を紹介するという趣旨で進めていこうというこの項ですが、前回に引き続き、幕末から明治にかけて活躍し、現代の日本のあり様にも影響を与えているといえる「山岡鉄舟」についてお話させていただきたいと思えます。

鉄舟の剣5

鉄舟の興した無刀流の免許皆伝につながる試練、「誓願」ですが、その最終段階となる第三期では一日あたり二百面の試合を立ち切りで一週間おこないます。

この立ち切り試合は、技術の進歩をはかるのが目的ではなく、身心を打失して無我になり、至誠一片になる、つまり無刀流の名の元になる「無の心刀」を磨く事が主眼とされています。立ち切り試合

の本人は、その字の通り立ち切りで入れかわって立ち向かう新手を相手に朝から夕方まで試合をします。しまいには体力の限界をむかえ腕力や少々の技術では通じなくなってきました。そこをさらに撓ま

ずに乗り越えていくと、雑念妄想も消え失せ、心身を打失するところに至るのです。普通われわれはそこに至るまでやりぬかず、途中で妄念と妥協してしまうから妙境に入れぬまま終わってしまうのですが、試合となれば相手のある事ですので妥協する暇もないといえ、半ば強制的に心身打失の状況を作っているといえるものでした。

しかし鉄舟がなみなならぬ想いで作った「誓願」は、結局透過する者が出ないまま終わってしまったのでした。やはり体力的にも精神的にも格別の天分をもっていた鉄舟の考える方法論は、なかなか一般人には通用しないものだった様です。

高野佐三郎

昭和の剣豪に高野佐三郎（文久2年

1862年—昭和25年1950年）という人がいます。

明治12年、高野が16歳の時、地元で剣道大会が開かれました。剣道場明信館の館長を祖父に持ち、「秩父の小天狗」と異名をとるほどの腕前を持っていた高野は、病気の祖父の代理としてこの大会に参加したのでした。

相手となったのは高崎に英隆館という道場を開いていた岡田定五郎というものでした。岡田はこの年、30歳。剣術家として脂の載った頃といえるでしょう。

佐三郎は幼少より祖父より剣術の英才教育を受け、数えの5歳（満年齢で3〜4歳）で祖父と五十六本にも及ぶ組太刀を殿様の前で見事に演じとげるといふ奇才ぶりを発揮し、その高名は轟いていました。少し傲慢になつていたかもしれません。岡田との試合で高野は得意の片手上段に竹刀を構えましたが、その際年上の岡田に不遜にも「失礼します」とも言

わなかつたのです。以下次号（二峰 義紹）